「社会を生き抜く力」を磨く、横浜商科大学の学び

横浜商科大学では、
学生一人ひとりの夢や目標に向かう探究心を原動力に、
幅広い知識やスキルを身につけ、地域や社会に貢献できる
「安んじて事を托さるる人（建学の精神）」を育てます。

YOKOHAMA COLLEGE OF COMMERCE CONCEPT BOOK

WHY YCC?

人生の土台となる
「社会を生き抜く力」を
身につける。

横浜商科大学

〒230-8577 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾4-11-1
TEL.045-571-3901 FAX.045-571-4125

横浜商科大学は、2025年に向けて『総合教養教育』を軸とした教育改革に取り組んでいます。

予測が難しく、変化が激しい社会。
そんな時代に求められるのが「社会を生き抜く力」だと私たちは考えています。
その力を身につける教育を実践するために、
横浜商科大学は『総合教養教育』という新しい学びを推進していきます。

「社会を生き抜く力」とは、学生が自ら蓄えた知識や能力を関係づけて組み合わせ、課題の解決に活かせる力です。

その力を発揮するために、学生一人ひとりが自分自身について理解することが大切だと考えています。
人生100年時代と言われる今。キャリアは、生涯を視野に入れたライフキャリアとして捉える時代となり、
将来の夢や目標に向けて生きる目的を意識して学ぶことが、大切になっていると考えています。 P3「キャリア教育」へ

新しいカリキュラムでは、「対話する」ことを大切にします。
教員や学生からの「問いかけ」に考えをめぐらし、意見を伝え、互いに問答を繰り返します。
対話をとおして、それまでに学んだ知識と新しく得た知識を整理して、いつでも取り出し、
関係づけて組み合わせることのできる知識として引き出しに蓄えていきます。 P4「対話型教育」へ

初年次教育では、学生一人ひとりが大学での4年間の学びを深めるために「考える力」を鍛えます。
「なぜ、大学で学ぶのか？」という問いから、学生が自分事として考えること、
グループワークをとおして自分なりの答えを伝え合っていきます。
それにより知らなかったことを知る楽しみ、知ることによる成長実感を得て、知的好奇心を高めていきます。
知的好奇心は、学生の探究活動や能動的な学びの原動力となります。 P5「初年次教育／社会力演習」へ

「考える力」は、まず「やってみる」という意識から、主体性が高まります。
フィールドワークやアクティブな活動をとおして社会の課題に気づき、授業や経験をとおして蓄えた知識を活かして解決策を考えます。
解決策は、実行して振り返る試行のプロセスをとおして、
必要な知識を補い「社会に活かす」ことのできる実践力として鍛えていきます。 P6「実効型ビジネス教育」へ

これらの教育プログラムによる『総合教養教育』によって、
横浜商科大学は、人生の土台となる「社会を生き抜く力」を育んでいきます。

総合教養教育で重視する4つの教育プログラム

2023年度教育体系と教育改革で重視する4つの力

総合教養教育の体系（2023年度版）

未来に向けて生きる力を育む
「キャリア教育」

POINT
- 生涯を視野にしたライフキャリアの視点から、学生一人ひとりが自分自身について理解を深め、将来の夢や目標に向けて学んでいくための目的意識（マインド）を育みます。
- 学ぶ目的（マインド）を育みながら、各科目で得た知識やスキルの「統合化」「自分事化」を進めます。

不確かな時代に

生きる力を育てる

キャリア教育で
自己を理解し、学ぶ目的を意識して
各科目や経験から得た知識を関係づけ
「統合化」「自分事化」していく。

卒業後

キャリア教育の提供価値

学びを社会に活かす

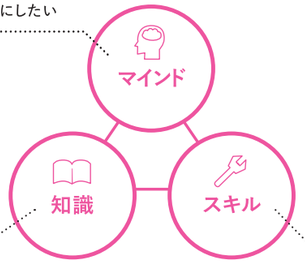
CASE ハンドボールを普及させたい想いと、学びと経験が就活に直結

髙橋 紀大　商学部 商学科４年 川崎市立幸高等学校 出身

- 大学で学びながら「自分の好きなコト」「やりたいコト」を仕事にしたいと気づき、商学とスポーツマネジメントを学んだ。
- インターンシップでの経験をとおして、スポーツの楽しみやおもしろさを伝える仕事で、自分を活かしたいと考えるようになった。
- 就職活動では、自分の想いと大学での学びや経験したことを伝え、ハンドボールのプロチームへの就職が決まった。

■ 中学・高校時代はハンドボール部
■ 将来は、スポーツを仕事にしたい

■ 商学科ではあったが、スポーツに関するさまざまな事象を学ぶ

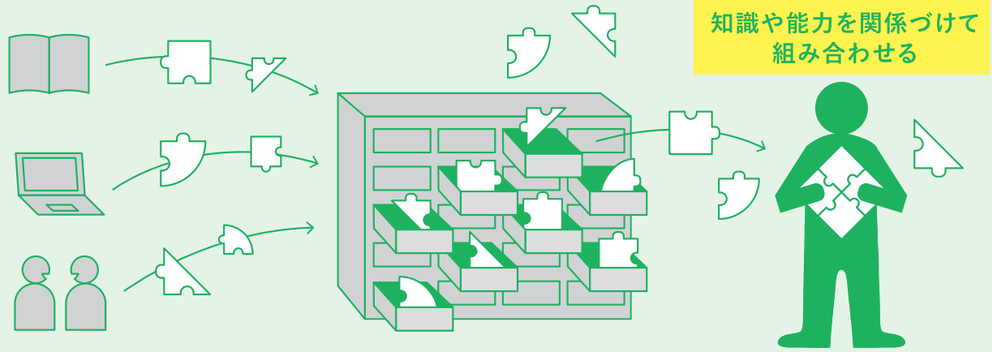


■ 横浜FCをはじめ、さまざまなインターンシップを経験
■ 試合運営や接客、ファンづくりなど、実践で活かせるスキルを磨く

知識や能力を関係づける
「対話型教育」

POINT
- 「対話」によって、自分の意見が相手に伝わるように論理立てて説明する習慣に加え、「聴く」ことから「考える」こと「表現する」ことを鍛えられます。
- 対話をとおして、それまでに学んだ知識と新しく得た知識を整理して、いつでも取り出し、関係づけて組み合わせることのできる知識として引き出しに蓄えていきます。

知識は、頭の中にある引き出しに蓄え、いつでも取り出し、関係づけて組み合わせられる



知識は、問いかけからはじまっていく

少人数制だからできる対話型教育

一人ひとりの個性や学習達成度に応じたきめ細かいサポート。

１年の授業

１年の必修授業では、先輩学生がクラス運営をサポートします。
（英語・10クラス・約35名 / ICT・13クラス・約25名 / 社会力演習・13クラス・約25名）
※グループワーク形式の場合、1グループ5~6名

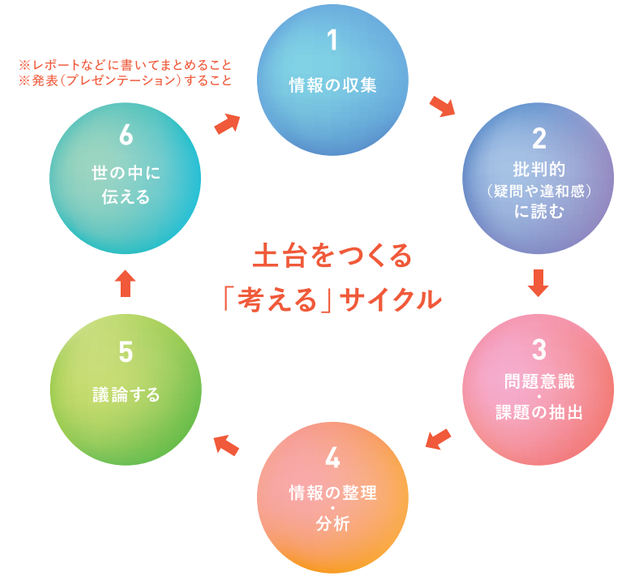
2・3・4年のゼミナール

ゼミは先生との距離が近く、なんでも相談できる関係が築けます。
（ゼミナール 定員制15名）

知的好奇心と探求心を育む
「初年次教育／社会力演習」

POINT
- 学生一人ひとりが大学での４年間の学びを深めるために「考える力」を鍛えます。
- 「考える力」は、知らなかったことを知る楽しみ、知ることによる成長実感を得て、知的好奇心を高めていきます。
- 知的好奇心は、学生の探究活動や能動的な学びの原動力となります。

考えるサイクルを身につける初年次教育



対話

フィールドワーク

プレゼン

CASE 1年春学期「社会力演習」で「考える力」を習慣化

１年の春学期の14回の授業をとおして、「考える力」を養います。学生が自分事で考えられる問いから授業がはじまり、グループワークをとおして自分の意見を伝え合い、最終的には発表できる状態へと進めていきます。

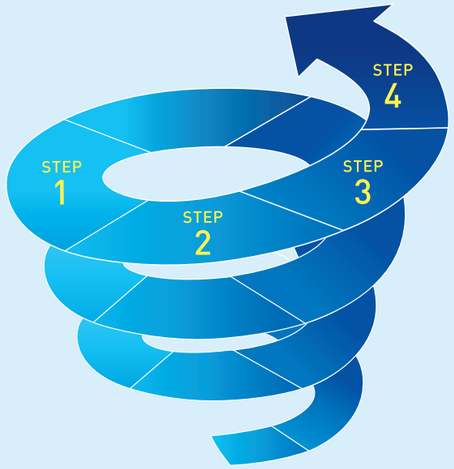
社会力演習の授業プロセス

オリエンテーション → 情報収集 → 課題発見 → 分析・検証 → 課題解決 → 発表

社会に活かせる実践力を鍛える
「実効型ビジネス教育」

POINT
- 「やってみる」ことから社会の課題に気づき、主体性が高まり、自分事として考えるようになります。
- 解決方法を考えて、自ら動いて実行する。そして振り返ることで、必要な知識やスキルに気づきます。
- 実行して振り返る試行のプロセスをとおして、必要な知識を補い「社会に活かす」ことのできる実践力を鍛えます。

自分と社会の関わりから課題に気づき、解決する方法を考え実行し、結果を振り返ることを繰り返します。これを４つのステップ（気づく、考える、動く、身につける）で習慣化し、スパイラルアップさせていきます。



STEP 1 気づく
フィールドワークなどアクティブな学びで実例に触れ、社会の課題に気づく。

↓

STEP 2 考える
授業で得た体系的な知識を活かして、解決策を考える。

↓

STEP 3 動く
解決策を実行して振り返り、不足している知識に気づく。

↓

STEP 4 身につける
試行のプロセスを通じて得た知識を定着させ、不足していた知識を補う。

CASE 趣味のプラレールをきっかけに、地域の社会課題を実感

今村 真己　商学部 観光マネジメント学科１年 自由ヶ丘学園高等学校 出身

- 大学１年で受講した「ボランティア活動演習」で、趣味のプラレールを活用したイベントで「やってみる」を実践。
- 地域の子どもたちと触れ合ったことから、子どもたちの居場所や遊ぶ機会が少ないという社会課題を実感。
- 具体的な経験によって、「地域に貢献できる人になる」という目標に向けて、学びを深めたいという意欲が高まる。

■ プラレールが好き
■ 地域に貢献できる人になることが目標

■ １年次必修科目をはじめ、商学や観光を学ぶ

■ ボランティア活動演習の東寺尾地域ケアプラザでの実習を経験
■ 自身の趣味であるプラレールイベントの企画から運営まで手掛ける